

## 『落窪物語』―色好みの男の系譜へ

伊藤 禎子

### 道頼は反色好みか

『落窪物語』は言わずと知れた継子いじめの物語である。「わかうどほり腹」の姫君が正妻である継母にいじめられているのを、左大将の息子の道頼が救出するという、シンデレラストーリーである。とはいえ、姫君を救出するところまでの展開が非常に速く、その後の復讐と報恩に紙数が割かれている事実は、すでに指摘されて久しい。そしてその復讐は、道頼から姫君への「愛」を根拠になされている。言い換えれば、愛を根拠にすることで、復讐の残酷さは隠蔽される。道頼は、右大臣の姫君との結婚の話題についても即時に拒否し、姫君一人への愛を貫く。このことは、一夫一婦を理想とするものであり、継母・継子の関係を生みやすい当時の一夫多妻制への批判であるという三谷邦明の見解がある(注1)。これに対し、藤井貞和は、道頼が一夫一婦主義をとることがすなわち一夫多妻制への批判には当たらないとする。その上で、道頼が姫君一人を愛する造形に変化することについて、「色好みの終わり」と述べる(注2)。

この帯刀の女親は、左大将と聞えける御むすこ、右近の少将にておはしけるをなむ、養ひたてまつりける。まだ妻もおはせで、よき人のむすめなど、人に語らせて、人に問ひ聞きたまふついでに、帯刀、落窪の君の上を語りきこえければ、少将耳とまりて、静かなる

人間に、こまかに語らせて、「あはれ、いかに思ふらむ。さるは、わかうどほり腹ななりかし。われに、かれ、みそかに逢はせよ」とのたまへば、「ただ今は、よにも思しかけたまはじ。今、かくなむと、ものしはべらむ」と申せば、「入れに入れよかし。離れてはた住むなれば」とのたまふ。(卷一・二三)

―(略)―

帯刀、大将殿に参りたれば、「いかにぞ。かのことは」、「言ひはべりしかば、しかじかなむ申す。まことにいと遙げなり。かやうの筋は、親ある人は、それこそともかくも急げ、おとども、北の方に取りこめられて、よもしたまはじ」と申せば、「さればこそ、入れに入れよとは言へ。婿取らるるも、いとはしたなき心ちすべし。らうたうなほおほえば、ここに迎へてむ」と、「さらずは、あなかもとても止みなむかし」とのたまへば、「そのほどの御定め、よく承りてなむ、仕うまつるべかめる」と言へば、少将、「見てこそは定むべかなれ。そらにはいかでかは。まめやかには、なほたばかれ。よにふとは忘れじ」とのたまへば、帯刀、「ふと」ぞ。あぢきなき文字なる」と申せば、君うち笑ひたまひて、「『長く』と言はむとしつるを、言ひたがへられぬるぞや」など、うち笑ひたまひて、「これを」とて御文賜へば、……(卷一・二五)

―(略)―

……と言ふ声、いとらうたければ、少将の君、なほざりに思ひしを、まめやかに思ひたまふ。(卷一・三三)

すでに先行論文が繰り返して指摘するとおり、道頼はその登場当時、「色好みの男」であった。普段からさまざまな女性の情報を帯刀から聞き出しており、落窪の姫君については「わかうどほり腹」という高貴な血筋ゆえに興味を持った。そしてとにかくたばかって部屋に入れよと命じる。はじめにおつきあいするのかどうかと追及する帯刀に対して、道頼は顔を見てからでなければ決められないと言ひ、気に入らなければ関係を終えるまで、と簡単に発言する。このように道頼は好色な男であったのだが<sup>(注3)</sup>、実際に姫君に会ってみると、その魅力的な様子から、かつて「なほざりに思ひし」という過去があつたけれども、「まめやか」な態度に変化した。

そして中納言や北の方からのいじめの現場に居合わせた道頼は、姫君の心を慮り、彼らへの復讐を決意する。

少将、落窪の君とは聞かざりければ、「何の名ぞ、落窪は」と言へば、女いみじう恥づかしくて、「いさ」と、いらふ。「人の名に、いかに付けたるぞ。……」。——(略)——「落窪の君」とは、この人の名を言ひけるなりけり、わが言ひつること、いかに恥づかしと思ふらむと、いとほし。継母こそあらめ、中納言さへ憎く言ひつるかな、いといみじう思ひたるにこそあめれ、いかでよくて見せてしかな、と心のうちに思ほす。  
(卷一・六八)

このあと、道頼はほかの女性には目もくれず、姫君一人への愛を貫き、一夫一婦主義をとる男性へと変貌する。

他の物語には珍しいこの道頼の造形は、当時巷間に知れていたであろう「七夕伝説」と絡められ、二人の愛の物語は読者の理想としてあることを畑恵理子がまとめている<sup>(注4)</sup>。一方、神田龍身は、道頼の

残酷な復讐のやり方を指摘し、それが一夫一婦の愛を免罪符にしてのものであることから、色好みを捨てることか決して美德たりえないことを述べている<sup>(注5)</sup>。かくして現在の『落窪物語』は、色好みの男から反色好みの男へと造形が変化した道頼の姿を認めた上で、それが理想的な愛の姿であるのか、はたまたファッショ的な悪徳であるのか、という二局面を提示するに至っている。

だが、はたして本当に道頼の造形は変わったのだろうか。そもそも一人の人間が今までと違う人間に変貌するのはそうたやすいことではない。また当時の一夫多妻制の社会であつたという背景を考えてみても、このように一人の女に決め込む男の物語が誕生することには、やや違和感がある。つまりこのような物語を理想として受け入れるような社会状況だっただろうか、ということである。というのも、たとえ道長が頼通を叱咤するように、そしてその頼通をしても妾の立場に至っては複数人いたように。なるほど道頼は、ほかの女性には目もくれず、右大臣の姫君との縁談に対する乳母への拒絶・怒りは、道頼の造形の変化を思わせるにふさわしい。しかし、姫君を愛していると言ひながら、復讐をすることに於いて姫君の言葉には耳を貸さず、勝手にやりたい放題にやっている様が目につく。もし彼女のことが本当に大事で愛しているがゆえの復讐であるならば、もつと彼女の想いを聞いた上での行動をとつてもよいのではないだろうか。これは素朴な疑問に過ぎないが、あらためて道頼の造形が変化したと言われることを疑ってみると、実際のところ彼は何も変わっていないのではないかと、思えてくる事実があるのである。色好みをやめた男との、一夫一婦の純愛物語として評価されている『落窪物語』を読み直してみたい。

## 七夕伝説とのずれ

畑恵理子は、落窪の姫君の縫製能力や、道頼の「天の川」の歌から、七夕の愛の理想形を読み取っている。

まず姫君の縫製能力であるが、物語の開始すぐに次のように述べられている。

大方の心様さとして、琴なども、習はず人あらば、いとよくしつべけれど、誰かは教へむ。母君の、六つ七つばかりにておはしけるに、習はし置いたまひけるままに、箏の琴をよにをかしく弾きたまひければ、——(略)——つくづくと暇のあるままに、物縫ふことを習ひければ、いとをかしげにひねり縫ひたまひければ、

(巻一・一〇)

畑も繰り返し指摘しているが、本来できることなら七絃の琴の才能があつてほしいものを、教える人がいなかったためと理由付けた上で、「代替」としての縫製能力が指摘されている。織女性性は七絃の琴とも結びつくものであるが、姫君はそれではなく縫製能力であった。『うつほ物語』の俊蔭の娘のように七絃の琴の神聖さに守られる女主人公とは違う造形が目指されていると室城秀之は言う<sup>(注6)</sup>。しかしここで問題になるのは、織女としての能力である縫製能力を姫君が持つていたと言えば済むところの話であるにもかかわらず、物語は「七絃の琴ではない」点を繰り返し返すことである。落窪の姫君は、織女でありながらも、キンの琴の点においては違つと限定された上での(織女)なのである。

次に道頼が詠んだ「天の川」の語であるが、この語が詠まれた時期と七夕がずれることが指摘されている。

かくて、少将言ひそめたまひてければ、また御文、薄にさしてあり。

ほにいでていふかひあらば花薄そよとも風にうちなびかなむ御返りなし。

時雨いたくする日、「さも聞きたてまつりしほどよりは、物思し知らざりける」とて、

雲間なきしぐれの雨は人恋ふる心のうちもかきくらしけり御返りもなし。また、

天の川雲のかけはしいかにしてふみみるばかりわたし続けむ日々にあらねど、絶えず言ひわたりたまへど、絶えて御返りなし。

(巻一・一九)

畑は場面と時期がずれていても(傍線部)、「天の川」という語を使うことにより、逆説的に「七夕伝説」の意識付けがなされることを述べるのだが、はたしてそうであろうか。もし二人の愛に七夕伝説を印象づけたのであれば、そのものずばりの七月七日に二人が出逢う設定にすればよかつたのではないのか。しかし物語はそうせず時期を「ずらし」た。そして当該箇所において、「天の川」の語を用いて和歌を送るとしても、それ以前から姫君は、道頼の和歌に対しての返事を拒み続けている。さらに二人は出逢つてから、七夕伝説の二人のように愛におほれることはない。牽牛と織女がひきはなされる理由でもあった仕事の放棄を彼らはけつしてしない。道頼は順調に出世し、姫君は衣服を縫い続けるのである。つまり二人の愛は七夕伝説のそれとは「ず

れ」ていることを印象づけるものと考えるべきである。物語は、七夕伝説を引き合いに出しながら、二人の仲むつまじさをそれとリンクさせているように見せながら、実態はかく異なることを「設定のずらし」において示している。

### 「落窪」の意味

道頼が落窪の姫君一人を愛するきっかけとなった場面は、高橋亨や三谷邦明の論考に詳しい。高橋は「落窪」という語に込められた性的蔑称の意を指摘する<sup>(注7)</sup>。三谷は、「女君の性的魅力を知っている男君にとって、劣った女性性器という意味の「落窪」という言葉は姫君に対するひどい侮辱として映り、しかも自分に対する蔑視でもあると思ひ、激怒したに相違ない」と述べる<sup>(注8)</sup>。そのような性的蔑称である落窪という用語を用いて、北の方や中納言が姫君を侮辱することに対して、道頼は怒り心頭に発して復讐を決意するのである。それゆえに彼の復讐は、まず四の君と面白の駒の結婚話にあるような、性的屈辱を与えるものになっている。

「窪」という用語が女性器の意を象徴することは、『うつほ物語』にも見える。源正頼とその息子たちが宮中に居並ぶ様子を見て、仲忠という一人息子しかいない藤原兼雅は、嫉妬ゆえに次のように漏らす。

かくて、「除目侍なるを、参らせたまはむとやすむ」。おとど(兼雅)、「何しにかは参らむ。出でて歩けば、そこにも面伏せにて、人の人とも見たらねば、生きたるかひもなきに」。――(略)――「……久しう参らで、帝の御顔もゆかしうぞある、とて参りて見れば、右のおとど(正頼)、われはと思ひ顔にて、孫の皇子たちは、駒をす

ぐりて並び居、子どもは、雲居のごとつきて、土を食ひて膝まづき合へり。いでや皇子たちを思へば、宿世心憂く、いかなる窪つきたる女子持たらむとぞ見ゆるや。また、今一つの窪ありて、蜂巢のごとく生み広ぐめり。……」  
(蔵開 中・五一四)

正頼やその息子たちが宮中に堂々と居並んでいることについて、「いったい正頼の妻の大宮にはどんな「窪」がついているのだろう。また引き続き、あて宮というもう一つの「窪」があつて、ますます一族は横へと広がりを見せるようだ」と。非常に下品な物言いであるのだが、次々に子を産む女性のことを「窪つきたる女子」と言うのであり、高橋の言うように「窪」が女性器を意味していることはこの場面からも了解しうる。その「窪」という語に「落」というマイナス語がついた造語を聞いて、道頼は復讐を決意するのである。

先に引用した当該場面であるが、道頼は、その語の恥ずかしさをことさらに強調していることから、「窪」の意を女性器としてとらえているのは疑いなしと思われる。しかし、肝心の北の方や中納言はどいうなのであろうか。この「落窪」なる用語は、他の物語には登場しない造語である。だからこそ、物語冒頭において、この用語の説明がなされていた。

北の方、心やいかがおはしけむ、仕うまつる御達の数にだに思さず、寝殿の放出の、また一間なる落窪なる所の、二間なるになむ住ませたまひける。君達とも言はず、御方とは、まして言はせたまふべくもあらず。名をつけむとすれば、さすがに、おとどの思す心あるべしと、つつみたまひて、「落窪の君と言へ」と宣へば、人々も、さ言ふ。  
(巻一・九)

「落窪」という用語は、「寢殿の放出の、また一間なる落窪」とあるように、具体的な状況はつかみにくくはあるものの、あくまでも建築用語として提示されている。姫君には、寢殿とは離れた、普通は住まいに使いそうもないような場所があてがわれた。そしてその場所から「落窪の君」という呼称が誕生しているのである。つまり、北の方や姫君をそう呼ぶ周囲の人間にとって、その呼称の根拠は姫君の住まいにあるのであって、女性器としてではない。物語冒頭において、建築説明がなされた流れでの「落窪の君」の呼称であり、かつ父中納言の手前「つつみたまひて」はばかった呼称である「落窪の君」に、女性器としての裏の意を読み取るのは深読み過ぎる（注9）。

道頼がもう一度「落窪」について憤慨する場面がある。右大臣の姫君との結婚に関する、乳母とのやり取りにおいてである。

（乳母）「…かの君も、思ふ時は、上達部のむすめにはあんなれど、落窪の君とつけられて、中の劣りにて、うちはめられてありけるものを、かく類なく思しかしづくこそ、あやしけれ。人は、かたへは父母居立ちてかしづかるこそ、心にくけれ」と言ふに、中将、面うち赤めて、「古めかしき心なればにやあらむ、今めかしく好もしきことも欲しからず、覚えも欲しからず、父母具したらむをともおぼえず。落窪にもあれ、上り窪にもあれ、忘れじと思はむをば、いかがはせむ。人の言はむもことわり、そこにさへ、かく宣ふこそ心憂けれ。」（巻二・一六一）

乳母は、「落窪の君」という呼称を出して「うちはめられて」と述べている。「うちはむ」とは「閉じ込める」の意であるから、乳母は性的蔑称としてではなく、「落窪に閉じ込められた姫君」という建築用

語について発言していることになる。上達部の娘だとしてもそのようなひどい扱いをされ、大切に育てられていない娘では、両親の後見を得られない、それよりは右大臣の姫君と結婚したほうが道頼のために良いという点を乳母は伝えようとしているのである。しかしここで道頼は、「面うち赤めて」とあるように、「落窪」を性的蔑称として捉え、「上り窪」という造語を出してまで乳母をしっかりとつける。もはや道頼の前で「落窪」は禁句といった状態である。乳母は「閉じ込められている落窪の君」と呼んでいるだけだとしても、道頼にとっては「彼女が」落窪だろうと上がり窪だろうと」と言うように、彼女の女性的欠陥を示す用語になってしまうのである。

そもそも「窪」なる語が、女性の陰部という恥ずかしさの意を伴う語であるにしても、四六時中、誰にとつても、女性器の意味として存在するのではない。ある単語が卑猥な意味をも持つ場合、その語を卑猥な意味として捉えるかどうかは、そのように捉える主体の問題にある。それが造語であるならなおさらである。

北の方や乳母が発言する「落窪」はあくまでも建築用語としての「窪」であった。しかし、それを聞き取る道頼は「女性器」としての意味に捉え、姫君の恥ずかしさを慮り、北の方に復讐を決めたのである。そして「落窪に閉じ込められている姫君」と言う乳母に対しては、「落窪にもあれ、上り窪にもあれ」と、女性器としての「窪」の意味として敏感にその言葉を感じ取り、「そこにこそ、かく宣ふこそ心憂けれ」と、しっかりとつけるのである。そのような意味として捉えているのは、道頼自身なのである。

なぜ彼はそのような意に捉えてしまうのだろうか。それがやはり、彼の人物造形の基本であった「色好み」ゆえなのではないだろうか。彼は、かねてより帯刀に数々の女性の評判を聞いていた。実際に会う

てみて今後を決めればよいし、気に入らなければ捨てればよいという、いわば好きな男である。『うつほ物語』で、女のことを「雀」とたとえた兼雅が色好みの男として登場していたのと同じように、「雀」のイメージが「女」に結びついてしまうのは、道頼が色好みの男であるからではないだろうか。またそれ故に、彼の復讐の第一弾は、四の君と面白の駒との結婚なのではないか。

「世の人のけふのけさには恋すとか聞きしにたがふ心地こそすれ  
たままくくずの」と書いてやりたまへれば、少輔、文やらむとて歌  
をよみをするほどに、かくて賜へれば、よきことと思ひて、急ぎ書き  
てやりつ。

— (略) —

かの殿には、御文待つほどに、持て来たれば、いつしか取り入れ  
て奉りつる、見たまふに、かかれば、いみじう恥づかしうて、えう  
ちも置きたまはず、すくみたるやうにて居たまへり。北の方、「御  
手はいかがある」とて見たまふに、死ぬる心ちすること、かの落雀  
といふ名聞かれて思ひしよりもまさる心ちすべし。

(巻二・一三〇)

鼻が立派で「駒」のような顔立ちの面白の駒を四の君にあてがうところも然りだが、彼に詠ませた後朝の文の内容が、道頼の色好みとしての感性を思わせる。言い換えれば、色好きな男が本来取るべき態度の〈裏返し〉である。男女の夜を過ごした翌朝に「聞きしにたがふ心地」と詠まれてしまった四の君や北の方のショックは大きい。なぜなら、女性としての魅力の欠如を指摘されたことになるからである。つまり「落雀」である。道頼側の語り手は、「かの落雀といふ名聞かれて思ひ

しよりもまさる心ちすべし」と、女性器としての「雀」の意を踏まえ  
て感想を述べていることから、姫君のことを思う道頼が「雀」を女  
性器として捉えた上で復讐をしていることがわかる。この語り手の言  
葉はいわば道頼の心そのものである。

だが、その恥づかしさはいかばかりかと言われるものの、肝心の四  
の君や北の方が姫君のことを「落雀」とばかりにしていた事実とこの一  
件を関連づけることはない。もし北の方たちが「落雀」の意を女性器  
の意として自覚して呼んでいたのであれば、——そもそも自覚して呼  
んでいたならそれ以上の恥づかしさはないと思うが——、「落雀」と  
馬鹿にしていたが逆に四の君の方こそ「落雀」であると言われたに等  
しいこの一件について、もう少し何かしら気がついてもよさそうなも  
のである。しかし北の方は、「死ぬる心ちする」というばかりで、まっ  
たく気がつかない。

道頼は色好きな男から姫君への純愛を貫く男へと変貌したのではな  
い。事実として一夫一婦の形をとっているけれども、それが彼の中か  
ら色好み性が払拭されたことにはならない。彼の復讐を支えているの  
は、「雀」という語に性的な意味合いを自然に感じ取ってしまう、彼  
の「色好み」な性格なのである。

### 伊勢物語の引用

色好きな道頼により関係が強く結ばれることになった落雀の姫君と  
の恋であるが、あらためて彼らの恋を見ると、色好みな展開に  
より生成されているのがわかる。

結婚三日夜のことである。大雨ゆえに訪問をしぶる道頼が、ようや  
くにして姫君のもとへやってきたのであるが、ここは『伊勢物語』の

「身を知る雨」の段の影響を受けた場面であること、すでに指摘のありとおりである。

あこぎ、かく出でたちたまふも知らで、いとみじと嘆く。かかるままに、「あいぎやうなの雨や」と腹立てば、君恥づかしけれど、「などかくは言ふぞ」と宣へば、「なほよろしう降れかし。折憎くもはべるかな」と言へば、「降りぞまされる」と忍びやかに言はれてぞ、いかに思ふらむと、むつかしうて、添ひ臥したまへり。――(略)――とて、かいさぐりたまふに、袖の少し濡れたるを、男君、来ざりつるを思ひけるも、あはれにて、

なにごとを思へるさまの袖ならむ

と宣へば、女君、

身を知る雨のしづくなるべし

と宣へば、「今宵は、身を知るならば、いとかばかりにこそ」とて臥したまひぬ。(巻一・四八)

これまで『伊勢物語』の影響・引用として指摘されてはいたものの、一夫一婦主義をとり、色好みではなくたはずの男の物語でありながら、なぜ二人の重要な三日夜の場面において『伊勢物語』が引用されなければならないのか、その意は明確にされていない。しかし、前節において、道頼の色好み性は消えていないことを説明した今、この場面の持つ意味が見えてくるのではないだろうか。つまり、彼らの恋は、色好みの終焉としてあるのではなく、むしろ逆に色好みの世界を伴って作られているという事実である。

男、文おこせたり。得てのちのことなりけり。「雨のふりぬべき

になむ見わづらひはべる。身さいはひあらば、この雨はふらじ」といへりければ、例の男、女にかはりてよみてやらす。

かずかずに思ひ思はず問ひがたみ身をしる雨はふりぞまされる  
とよみてやれりければ、みのもかさも取りあへで、しとどにぬれて  
まどひ来にけり。(百七段)

『伊勢物語』では、業平と思われる色好きな男が、まだ歌を詠めない女の代わりになって男へ歌を送る。そのすばらしさゆえに藤原敏行は女のもとを通い続ける。雨が降る夜、通うことをしづつしているとまたしても業平代読の歌が届く。「身をしる雨はふりぞまされる」と聞いた敏行はすぐさまびしょ濡れになって女の家へやってくる、という話である。色好きな業平と敏行の対決場面として読めるおもしろい段である。

結婚三日目の夜に大雨が降るといふ困難な状況の一場面に、この『伊勢物語』の色好みの世界を引寄せてくるのは、姫君による「降りぞまされる」という独り言と、「身を知る雨のしづくなるべし」という締めめの歌によつてであることも重要な点である。つまり、道頼がただ一人色好みではなく、その色好みの世界を姫君も生きている、ということである。二人の夫婦の物語は、「色好みの物語」の想像力によつて生成されている。

さらに言えば、――交野の少将を非難する道頼のあり方と同様に――業平の色好み世界を否定しながら、道頼流色好み世界へ塗り替えていると言えるのではないか(注10)。『伊勢物語』を引用しつつも雑色に疑われ糞尿の香漂わせるパロディ化をする。そのあとで、「身を知る雨」と詠む姫君に対し、道頼は「今宵は、身を知るならば、いとかばかりにこそ」(身を知ると言うなら、今宵わたしが来たのだから、

愛されている身の上を知るのでしょうか」と言う。パロディの直後に、なんとも色めいた対応をしているではないか。

### 色好きな男のエネルギー

色好みだった道頼が、姫君一人に決めたあと、その愛に忠実に、復讐を誓うという展開として『落窪物語』は読まれてきた。しかし、事実はそうではない。道頼はあくまでも色好きな男でしかない。彼が色好みであるからこそ、「落窪」という女性への蔑称に気づき、復讐を誓ったのであり、その思いを果たすためには、他の女性と恋に落ちていく場合ではない。かくして、結果的に一夫一婦主義な男性になっているのである。しかし、本来多くの女性へ関心を向けられるだけのエネルギーのある男性が、一人の女性にのみ思いを向けることになったために、道頼にはエネルギーが有り余っている状態となる。色好きな男が、多くの女性へ情熱を向けなくなった結果、その有り余るエネルギーが中納言・北の方にのみ向けられることになった、そのエネルギーのすさまじさが、かの繰り返しされる復讐の段なのである。

そのエネルギーは、四の君と面白の駒の結婚に始まり、四の君と帥の再婚話にまで続いていく。そして四の君を再婚させることにした道頼は、「かの、『落窪』と、言ひ立てられて、さいなまれたまひし夜こそ、いみじき志は、まさりしか。その夜、思ひ臥したりし本意の、皆かなひたるかな。」(巻四・二七二)と、「落窪」の語によって復讐を決意したことを思い返し、その意が叶った今を満足げに語るのである。

### 色好みと人心掌握の権力

彼ら二人の愛の物語が、単純に美徳とは言えない旨が神田により指摘されたのだが、色好みを終えたことよって美徳ではない世界ができてきたのだとしたら、いったいに『落窪物語』は何を達成したことになるのだろうか。一方、畑は姫君の織女としての超人的な縫製能力を繰り返した。しかしその結果わかったことは、七夕伝説とずらざれている事実であった。そうなると、そもそも道頼が反色好みへ転じたという従来解釈そのものも疑われてくるのである。本稿で見えてきた結果、道頼は決してその内部に秘めた色好みの性質を失ってなどいなかった。姫君を救う契機となる「窪」の語に反応するのは色好みゆえの感覚に基づく。そして彼のおこなった人心掌握の術も同様である。さんざんに復讐を遂げた後にもかかわらず、中納言家への報恩の結果、中納言は道頼に忠誠を誓うこととなる。道頼は姫君を救うべく独裁的な存在であるが、決してその独裁性によって無理矢理に人を取り込んでいるのではない。「心」をつかんでいるのである。力でもって相手を抑えるのではなく、あくまでも「心」に取り入って相手側が認めた上で取り込まれているのである。被支配者は権力者のすばらしさを認めて、権力者の掌中に転がされることを喜びとし、翻弄されることに酔いしれ、忠誠を誓う。これこそ——『伊勢物語』において「ありしにまさる藤の陰かも」と揶揄されたような——、「政治権力者」色好きな男たち」の有り様ではなからうか。

そして、その権力者の姿を「絶対」のものとしてのみ描いていないのも確かである。中納言が忠誠を誓うとし、子供たちへもその旨を主張する場面で、北の方は「死ねかし」と思っている。この言葉じたい

はひどいものであり、継母の人間レベルの低さを物語るものであるが、一方で今までひどい復讐をされてきたにもかかわらず、これまでの屈辱を簡単に消化し、翻って忠誠を誓おうとする中納言の態度は、継母ならずともおろかなものに思えよう。

〔中納言〕「われ死なば、代りには、をのこ子にもまれ、をんなにもあれ、君に仕うまつれ」と、いとさかしう言ひいます。かかれば、北の方、憎し、とく死ねかしと思ふ。——〔略〕——〔中納言〕「異子ども、これらうらやましとだに思ふべからず。同じやうに力入り、親に孝したるだに、少し人々しきになむ、よろしき物取らす。いはむや、こちらの年ごろ顧みるを、恩にやと思へ」と、いとさかしう宣ふを、君達は、ことわりと思したり。 (巻四・二四一)

そして、語り手は中納言のこのような行為に対して「さかし」と形容する。「さかし」とは「賢い」ことであるが、「ごさかしい」場合にも使用される。中納言の場合、後者の意であろう。語り手は、道頼の絶対的な権力の図を描いておきながら、一方でそれにだまされる中納言を「さかし」と見下す。語り手は『落窪物語』の描く、色好みな政治権力者とそれにおもねる被支配者の社会の構図を俯瞰する位置に立っている。

四の君の再婚について、彼女が面白の駒にだまされた悲劇を抱えたまま死んでいったとしたら、本当に不幸である。彼女がそうならず再婚することになったのは一つの幸せと言える。しかし、彼女の愛する娘について、再婚相手の前では娘と呼べない。この点から言えば、幸せとは言えない。一方、再婚相手となった男性も、亡くしたばかりの前妻をすぐに忘れて再婚しなくてはならないため、亡き妻への悲し

みに浸ることも許されない。そういう傷を残しはするものの、道頼が創り出しているものは、社会的な〈横のつながり〉である。そしてその〈横のつながり〉を創り出し、保持し得るのは、『うつほ物語』の源正頼を彷彿とさせるような〔注1〕、色好みな政治権力者・〈王者〉の特質といえる。

道頼は、他を圧倒する大権力者なのであり、その造形の本質は「色好み」である。復讐を通して中納言家の人間を支配し、人心を掌中のものとする。四の君の再婚にまで決定権を持ち、貴族世界の人間関係の構築も道頼次第なのである。『落窪物語』は継子いじめの物語を大テーマとしているがゆえに、多様な女性との好色場面が描かれていないのであるが、そのことによってすなわち色好みの終わりと評価されてはならない。

光源氏は、「先帝の後腹」の四の宮である藤壺に思い焦がれた。彼女以外を本気で愛することは出来ず、その代替として紫の上を愛した。紫の上が、父兵部卿の宮に引き取られることになって、その直前に自ら二条院へ連れてきた。それにより、継母と紫の上との「継子いじめの物語」が回避された。一方、道頼は、常日頃から帯刀に良い女性の情報を聞き、「わかうどほり腹」の姫君である落窪の姫君に意を留めた。そして継母からいじめられている姫君を救った。その彼は、着実に出世し、人心を掌握する大権力者へと成長を遂げ、落窪の姫君との夫婦関係は理想的なものとなり評価され、准太上天皇にまでつめた光源氏。

他の物語の主人公が「色好み」の造形から逃れられないように、『落窪物語』においても主人公道頼の本質は色好みであり、その彼の栄華を語っている。『落窪物語』も、色好みの物語の系譜を免れてはいないのである〔注2〕。

\*本文の引用は、『落窪物語』（新潮日本古典文学集成）、『うつほ物語』（新編日本古典文学全集）、『伊勢物語』（日本古典文学全集）による。

【注】

- 注1 三谷邦明『落窪物語の方法』（物語文学の方法Ⅰ）有精堂、一九八九年）  
 注2 藤井貞和『新日本古典文学大系』「解説」（岩波書店、一九八九年）  
 注3 高橋亨「色ごみの文学と王権」（新典社、一九九〇年）で、「色ごのみ」とは好色と同じなのだ、いったんは言い切ってしまった方がよいとも思う」と述べる。  
 注4 畑恵理子『王朝継子物語と力——落窪物語からの視座——』（新典社、二〇一〇年）  
 注5 神田龍身『源氏物語Ⅱ性の迷宮へ』（講談社メチエ、二〇〇一年）。業平のような色好み像を否定しながら、色好みそのものを否定して権力者になった道頼の反対側に、色好みでありながら破滅せず栄華を極めた光源氏という主人公がいると述べている。  
 注6 室城秀之『落窪物語 下』（角川ソフィア文庫、二〇〇四年）「解説」  
 注7 高橋亨「〈落窪〉の意味をめぐって—物語テクストの表層と深層—」（『日本文学』一九八二年六月）、「男性作品から女の文学へ」（『物語文芸の表現史』名古屋大学出版、一九九一年）  
 注8 三谷邦明『新編日本古典文学全集』「解説」（二〇〇〇年）  
 注9 （注8）で、三谷も北の方たちが中納言の手前、女性器としての意で呼称していたわけではあるまいと述べる。本稿では、なぜ道頼はそのように「しか」受け取らないのかについて問題視したい。  
 注10 この先、道頼が面白の駒への代読を申し出たとき、駒は「よきことと思ひて」、内容を吟味することなくそのまま書いて四の君に送った。これは道頼が「色好みの男」であるからこそ、この手の歌を参考にしてしかるべきと思ひ込んでいるからである。また送られた側の継母も、「色好みは、人のせぬやうをせむとなむ。」として自らを納得させようとしたが、これも道頼が「色好みの男」と信じて疑っていないからである。

注11 室城秀之『うつほ物語の表現と論理』（若草書房、一九九七年）  
 注12 （注3）において、「道頼がほんとうに「色ごのみ」であったか否かを規定しようとしても、ほとんど意味はない」と述べるが、中古文学史の系譜を

考える上で、男主人公が結局のところ色好みであるのか否かは重要な点であると思う。『竹取物語』において、かぐや姫を前に五人の色好みの求婚者も、色好みの王たる帝も敗北を余儀なくされる。しかし、そのような彼らを敗北させられるかぐや姫の凄さがあるのであり、そもそも色好みでなければ、かぐや姫の求婚者にもなり得ないのである。どんなにストイックな「うつほ物語」の藤原仲忠にしても、「楼の上」巻で色好みな面を垣間見せるように、父兼雅の血から逃れることはできない。

※本稿は平成27・28年度「日本文学史Ⅰ」の講義で扱った内容の一部である。

（本学兼任講師）